

## Good Mornin' KENYA!

京都大学 地球工学科 二年生 宮崎 祐輔

ケニアに行って、多くの出会いがあった。エルドレッドで出会った、CORE の喜田さん、松本さん、そしてビレッジステイ先の村人たち。ナイロビで出会ったマトマイニの子供たち、菊本さんやたまたま孤児院で一緒に過ごした日本の人たち。こうした出会いの思い出を語り始めるときりがないので、ここでは、ずいぶんお世話になったエルドレッドの村人たちとの思い出について書くことにして、そうすることで、エルドレッドでの全ての出会いに感謝の気持ちを示したいとおもう。

ビレッジステイが始まる日。前日は雨が少し降ったが、その日は天気がよく、カラッと晴れた気持ちのよい天気だった。ビレッジステイ先のキクユ族の村の入り口まで、松本さんにトヨタのハイラックスで送ってもらっていた。それまでの道は、アスファルトで舗装されていて、たまに穴が開いていることもあったが、スムーズに進んでいた。しかし、村に入るその瞬間に、大きく車体が揺れた。窓から前方を確認すると、ところどころ深い轍があり、それらには泥水がたまっている。きっと、このような道を直すことになるのだろう、と自然に納得してしまった。そこからおよそ 50m先の県知事のオフィスの玄関先に進むまで、車は上下に揺れ続けていた。頭を天井に打ち付けそうになるほどで、よく気をつけないといけなかった。

揺れはましにはなったが、まだ少しゆらゆらと揺れたまま村の中心部に向かう。車から降りて、ふらついた足取りでホームステイを監督してくれるグラディスの家にお邪魔すると、ギゼリという乾燥させた豆とトウモロコシを水で煮て塩で味付けした、すこし塩辛い料理と甘いチャイをごちそうになった。それらの料理を食べながら、いよいよホームステイが始まるな…と思ってしまった。不安と期待が混ざって、胸の中が気持ち悪くなったのは、チャイとギゼリを一緒に食べたせいだけではないと思った。



(左がチャイで、右がギゼリ。)

## Good Mornin' KENYA!

京都大学 地球工学科 二年生 宮崎 祐輔

食事を終わると、グラディスと、グラディスの家でご飯を食べていた、地元の青年団のリーダーをしているアレックスを車に乗せて、ホームステイ先の家へと向かう。グラディスの家から車に乗って十分ほどでたどり着いた。玄関は少し太い木を縦に五本組んで、二本の木を横に組んで紐で縛って作られていた。ゴム製スリッパの底面のかかとのところを釘で固定して、レバーのようにして、扉にロックをかけていた。のちに、多く体験したことだが、このようにあるものを何でも工夫して使おうとする精神は素晴らしいと感じた。

玄関を開くと、そこには若いお母さんと赤ちゃんの家の中に続くドロドロの道があった。ここにステイする人は、長靴必須だね、と松本さんが言うと、そのまま家の中にアレックスとともに一人招かれてしまった。じゃあ、がんばって、と言いついて、そのままトヨタのハイラックスは去って行った。



(玄関。飼っているヤギが柵につながれていた。)

とりあえず、赤ちゃんがたまらなく可愛かったので、抱っこさせてもらった。透き通った水面みたいなその眼にみつめられて、こころが洗われたようになった。あれこれしている内に、この家の三人の大人と一人の子供が帰ってきて、みんなで自己紹介をしよう。

## Good Mornin' KENYA!

京都大学 地球工学科 二年生 宮崎 祐輔



(赤ちゃん。名前はジェム。)

子供の名前は、ジョロゲ。年は五歳だった。キクユ族では、男の子が生まれたり、その子のおじいちゃんの名前を、女の子が生まれたり、その子のおばあちゃんの名前をセカンドネームに継がせるそう。だから、ジョロゲはおじいちゃんの名前だそう。大人達は、ナイロビにある高校二年生のマーティン、ナイロビの大学を卒業して出戻りのムワンギ、そしてムワンギの兄貴のフランシスだ。フランシスと若いお母さんが夫婦の関係にある。マーティンは、血のつながりがあるのかどうか、よくわからなくて、本人はあっちこっちの家に居候しているようだった。そういえば、アレックスもあちらこちらの家でご飯を食べていた。互いに食事を分かち合う様子が、村のいたるところでみられて、いい村やなあと心底思ったものだった。ムワンギも寝床にベッドを作ってくれていて、いいやつやなあと、ムワンギにセンキュウ、センキュウと繰り返した。

## Good Mornin' KENYA!

京都大学 地球工学科 二年生 宮崎 祐輔



(左から、マーティン、フランシス、母親のエミー、子供がジョロゲ。)

道直しを明日に控えた今日、特にすることもなく、ジョロゲにボールをあげて一緒に遊んでいた。コロコロ転がるボールを追いかけて、足を滑らせてはコロコロ転がるジョロゲがとても愛らしい。転んでも簡単には泣かないところが、子供のアフリカンマインドのようだった。

中庭でジョロゲと遊んでいると、台所から(台所といっても、薪と大きな石を三つ三脚にしたかまど、ちょっとした机があるだけだった)とても香ばしい匂いがひろがってくる。マンドギをつくっていた。一日前に、ケリオビューで、食えるときにくっとかんとなあ、と喜田さんがおっしゃっている横で、ガツガツとマンドギを食べていたことを思い出した。

小麦粉に水と塩を少し加えて力強く練り、こぶし一つ分くらいにぶつ切りにして、バターを塗ってから延べ棒で薄く引き伸ばす。薄い正方形の形に整えたら、四枚の三角形に切り分け、高温の油で一気に揚げる。簡単にいうと、揚げパンに似ている。ただ、砂糖はついてないので、揚げたてをすぐ食べるのがベストだと思われた、と思っていたら、二日後に食事として出てきて、シワシワになったマンドギをみて大丈夫かな、と思いながら食べていた。不味くはないが、かたかった。

マンドギを 10 枚ほど平らげて、お腹いっぱいになったところに、急に雨が降り始めてきた。今日あれだけ泥々になっていた道は、この雨でどうなるのだろうか心配になった。そんなことを考えながら、部屋の中から外を眺めていると、緑を基調にした服と三

## Good Mornin' KENYA!

京都大学 地球工学科 二年生 宮崎 祐輔

角巾のような帽子をかぶったおばあちゃんがひょっこりと現れた。ハーイー、ハウアーユー??と、かたことの英語を笑顔で言うのがとてもかわいい。アイム、ファイン!と応えると、グッド、グッド、と返してくれた。生来、おじいちゃんおばあちゃんが好きなせいもあってか、滞在中、おばあちゃん(以下、マミー)は大きな癒しになった。慣れない生活で疲れても、マミーの部屋だとゆっくりできた。そんな場所を、自分がケニアにあっても、見つけられたことが幸せだった。



(マミー。とても落ち着ける空間でした。)

雨がやむと、陽は暮れ始めていた。電気やガスの灯りがないこの場所では、太陽が昇れば働き、太陽が沈めば休む。太陽の光と夜の闇が支配する、このとても落ち着いた時の流れがたまらなく好きだった。

暗くなると、マミーの部屋で晩ご飯を食べた。晩ご飯は、ウガリとスクマだ。ウガリはケニアの主食で、トウモロコシの粉に水を加えて熱しながら練り上げたもので、スクマはケールを塩で炒めてケールの水分で軽く煮つめたものだ。マミーは、鍋にいっぱいウガリを四等分して、お皿に、ぽんとおいてくれて、スクマをおたまに二杯くらい同じ皿にいれてくれた。お食べ、とニコニコしながら言うので、ニコニコしながら、一生懸命食べた。

## Good Mornin' KENYA!

京都大学 地球工学科 二年生 宮崎 祐輔

山盛りのウガリでお腹が膨れ上がって、少し眠くなっていた。ねむたいか？とムワンギに言われ、ねむたいと応えると、昼間に作ってくれたベッドの部屋まで案内してくれて、おれはシャワーあびるから先に寝とき、と言いのこして、一人ベッドで横になった。

まあ、なんとかかなりそうやなあ、と思いつつ、少し安心して、うつらうつらしていた。ほんの少し眠っていたのだろうか。ムワンギがマーティンと大音量のラジオを引き連れて戻ってきたところで、目が覚めた。うるさいなあ、と思いつつも寝ることに集中することにした。すると、ゆうすけ、もっとそっち寄って、と言いながら、ムワンギもベッドに入ってきた。畳一枚分くらいの小さなベッドに、まさか一人で寝るもんだとばかり思っていたので、まあ、いいかと思って寝ることにした。

ガタイのいい男を横に、二畳ほどの部屋の床にはもう一人寝ていて、ラジオからはアフリカンな音楽が流れていた。この空間にいて、これぞアフリカ…？みたいな気持ちになっていたのをよく覚えている。初日が強烈だったので、次の日からぐっすりと眠れるようになっていた。

翌朝…といきたいところだが、朝になる前にもう一つ出来事があった。トイレにいきたくなって、午前3時頃に目が覚めたときのことだ。ムワンギの上をまたいで、マーティンを踏まないように気をつけながら、長靴を履いて外にでる。懐中電灯がないと、もう何も見えないほど暗い。とにかく、外にある天井のない木造の小屋に向かう。寝床から10mほど離れている。そこがトイレになっていて、床には四角形の穴が空けてあり、深く掘り下げてある。そこに用を足すのだ。トイレを済ませて、ふと空を見上げると、たくさんの星が見えてとても綺麗だった。オリオン座が見えたのをよく覚えている。以前、砂漠でみた夜空を思い出して、すこし懐かしくなってぼんやり眺めていた。すると、何処からともなくうなり声が聞こえてくる…。なんか聞いたことあるなあ、と思っていたら、ワン！と急に吠えた。気づくと、トイレは野犬に囲まれていた。

アフリカやらインドやらにいる野犬の多くは狂犬病の菌を保有しているそう。もしかまれてしまって、狂犬病になると24時間以内に注射を打たないと手遅れになるそう。このような、人から聞いた話がその瞬間にフラッシュバックして、とにかく危険だということが、冷たく頭の中に刷り込まれていた。

## Good Mornin' KENYA!

京都大学 地球工学科 二年生 宮崎 祐輔



（因縁のトイレ…）

とりあえず、どうしようか考えた。持っているのは、懐中電灯とトイレットペーパーだけ。扉には、ロックがかかっているから、中に犬は入ってこれない…はず。やり過ごすか、なにか閃くか、扉あけてすぐ逃げるか、と考えた。たぶん、最後のは追いかけて終わりだろうな、というのは想像出来た。でも、やり過ごしても、いつまでここにいることになるのか分からないし、好きこのんで長いことここにいたがるやつなんてそうはいないだろう。

それにしても、まだやつらは外を囲っている。小屋の周りをうろついて、唸り声をあげている。天井がないので、手を伸ばせば、壁を越えて外側に手だけなら出せた。うまくいくかは、わからなかったけど、手を伸ばして懐中電灯の光を、壁を越えて外に向けた。そのまま、遠くの方を照らし、水平に素早く振った。数十秒ほど、続けると、野犬が向こうの方に走って行く音が聞こえた。少し様子を見て、気配がなくなったのを確かめて、扉をあけて、さっと寝床に戻った。初日からいろいろあったなあと思いながら、横になると、すぐにムワンギと仲良く二人で爆睡していた。

## Good Mornin' KENYA!

京都大学 地球工学科 二年生 宮崎 祐輔



(ムワンギ、寒い夜に毛布を奪い合った日々は忘れない…)

朝は、ムワンギに起こされて、ゆうすけ、うさぎのエサをとりにいくぞ、と、野犬のせいでまだ少し眠く、うとうとしながら、うんうん、と首を縦に振った。そのまま、ムワンギに連れられてとうもろこし畑へと向かう。この村の畑のほとんどが、サトウキビかとうもろこしの畑だった。ムワンギの家もとうもろこしの畑を持っている。



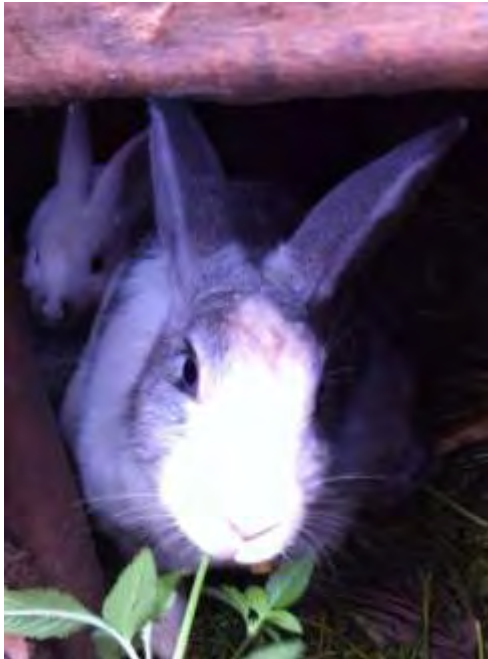
(ブラックジャムを集める道中にて)

うさぎのエサは、ブラックジャムという花で、トウモロコシやさとうきびの畑に自生している。スペードの形でぎざぎざの葉をもち、黄色の小さな花を咲かせる、膝丈ほどの植物だ。とにかく、両腕に抱えきれだけのブラックジャムを摘んで家に帰った。

## Good Mornin' KENYA!

京都大学 地球工学科 二年生 宮崎 祐輔

ウサギにブラックジャムを与えると、よほど腹をすかせていたのか、5匹のウサギが餌の取り合いをはじめていた。ブラックジャムの葉と花だけを食べていた。それでも、持ってきたブラックジャムの半分を一日で食い尽くしたから、食欲旺盛なんだな、とおもった。



(葉っぱに食らいつくウサギ。)

ウサギの世話を終えると、マミーが朝ごはんを用意してくれていた。朝ごはんは、昨日大量に揚げていたマンドギとチャイだった。ムワンギの家には牛がないので、粉ミルクを使ってチャイを作っていた。牛はいないが、鶏やら鳩やらが家の中を好き放題に駆け回っていた。朝飯を食べていても、部屋の入り口に三匹ほどがおこぼれに預かろうとこっちをじっとみつめていたのがおもしろかった。

今日から、やっと本題の道直しにはいる。初日にいろいろ起こって疲れていたの、早く道直しをしに行行って気分転換したくなっていた。食事を終えると、フランシスとムワンギと三人で道直しの現場に向かう。その道中の景色はとてもものどかなものだった。

## Good Mornin' KENYA!

京都大学 地球工学科 二年生 宮崎 祐輔



(道直し現場に向かう途中で)

アスファルトなんてものではなくて、ひたすら赤土の道が細々と続いて、その周りには緑の風景が広がっている。どこまでも広がる、とうもろこしやさとうきびの畑に、点々と牛や羊が草を食べる姿が視界に入ってくる。高地のせいもあってか、空気の濃度が薄く、しかしとても澄み切っていて、深呼吸すると、空気が肺の奥まで染み渡っていくようで、とても心地よかった。



(その辺を牛やヤギがぶらぶらしていた。)

道直しする現場に到着すると、松本さんが道具を揃えて待っていた。少し早めについたせいもあってか、ひともまばらだった。道直しを行う道は、前日の雨でところどころに深く泥水を湛えていた。轍の跡が深くて、足を入れると、長靴の足首あたりまで水が

## Good Mornin' KENYA!

京都大学 地球工学科 二年生 宮崎 祐輔

たまっていた。そんな道を、およそ 10～20mに区切って直していくことになり、一日目は、県知事さんの事務所の手前までを直すことになった。



（泥水をたたえる道）

土のう袋は、水にぬれるとあとで締め固めても、あまり固くならないそうで、まず弊害となる泥水をシャベルですべてかきださないといけなかった。シャベルですべての水をかきだすのは難しいので、8割がた除去したら、こんどは鍬に持ち替えて、轍の周りにへばりついた泥と一緒に水をかきだした。この作業を終えるのに、若干十人がかりで一時間ほどかかっていた。そうしていると、家事を終えてやってきた人や通りすがりの大人や子供が道直ちに徐々に参加し始めていた。

人も増えてきたところで二班に分かれて、土のう製作班と土のうを置けるように道を整備する班にそれぞれ散った。20Lの食用油をいれた円柱ポリタンクを、10cmの高さでカットして、そこに土砂をつめてならして、だいたい正確な量をはかってから土のう袋につめる。袋につめたら、手で袋の空気を抜くようにして袋の口をつかみ、こぶしの上でビニールの紐を使って口を縛る。あとは、土のうを隙間なく道に並べてから締め固める。

道を整備する班は、轍の箇所と深さを見ながら、土のうを何段に積むか、横に何個並べるかを検討する。見積もりがついたら、掘り出す面を釘と紐とメジャーを使って正確に(?)きめていた。そのあと、その面をシャベルと鍬で掘り出していく。

## Good Mornin' KENYA!

京都大学 地球工学科 二年生 宮崎 祐輔

簡単に説明したが、どの工程もなかなか難しかった。前日に雨が降ったせいもあって、土のうにつめる土が水をすって、とても重たくなっていたので、タンクに土を入れるときはまだしも、タンクから袋に移し変えるときにみんなよく土をこぼしていた。土のうを並べる道を整備するのも、泥をかき出すのに時間がかかっていたので、疲れをためたまま作業を続けることになった。

道直しのコンディションはかなり重要なのか、とおもう反面、村人はあんまり気にせず笑いながら働いているので、村人の協力は不可欠なんだなと納得した。いや、しかしアフリカ人すごいなあ、と率直に思ったのもこの瞬間だった。たまにうまいこと息抜きしていたけど、まあこれがアフリカなんかなと、ちょっとずつ彼らのことがわかるようになっていた。

一日目、二日目とだんだん人が増えた中で、少しずつ回転がよくなって、県知事の事務所の前まで道を直すことができた。終わってみると、道はとてもきれいになっていて、トヨタのハイラックスも快適に走っていた。が、直してないところで急にドスンとなっていた。ドノウテクノロジーいず、ぐっど、とムワンギが言った。せやな、と相槌をうった。



(道直し完了！)

ケニアに行って、実際にそこで生きて、自分の眼で見て、肌で感じて、心に残ったことがたくさんある。これまでのことはそのごく一部になるけれど、すべて自分にとっての真実だと保証する。二十歳になったら人間固まる、なんて誰が言ったのか知らない

## Good Mornin' KENYA!

京都大学 地球工学科 二年生 宮崎 祐輔

けど、自分も二十歳になってその言葉の意味が少し分かる。少し分かるからこそ、今ある価値観を揺さぶりたかった。けど、ここにきて揺さぶられるどころか、破壊されてしまってすごく爽やかな気分になっている。

たぶん、これから多くのことがあって、そのことが自分自身の考え方を定めてしまうようなことになるのかもしれない。ただ、今回の体験を終えて得たアフリカンマインド。じゃなくて自然にある良い率直さ、素直さ、のようなものをずっと大切にしていきたいと思う。破壊された価値観は、その場で創造されるから、いまはケニアが自分の新たな原点になる。だから、またいつか行く日に向かって、

”Good Moooooooooooooornin' KENYA!!”